

■2026年度 西洋音楽概論 授業内容 担当：近松 博郎（桐朋学園大学院大学 教授）

<p>第1回 4月22日(水)</p>	<p>導入—J. S. バッハの各創作期とこれまでのバッハ研究の道のり</p> <p>バッハは時期ごとに様々な活動地を渡り歩き、創作活動を変化させていったことが知られる。初回授業では、まずこれらの時期ごとに彼の創作活動を概観する。また18世紀後半以降、バッハ研究がいかに進展し、手法を変化させつつ成果を上げてきたかを振り返る。</p>
<p>第2回 5月27日(水)</p>	<p>J. A. ラインケンからの影響</p> <p>ラインケンは北ドイツの主要都市ハンブルクのオルガニストとして名声を馳せていた。現存するバッハ最初期の楽譜はこのラインケンのオルガン曲を筆写したものであり、若きバッハが彼の作品を研究していたことが分かる。本講義では二人の作品を通してその影響関係を考察する。</p>
<p>第3回 6月17日(水)</p>	<p>D. ブクステフーデからの影響</p> <p>ブクステフーデはリュubeckのオルガニストとして当時広く知られており、10代のバッハがアルンシュタットからはるばるその演奏を聴きに訪れたエピソードが有名である。本講義ではおもにブクステフーデのオルガン曲に焦点を当て、その音楽的特徴を浮かび上がらせる。</p>
<p>第4回 7月8日(水)</p>	<p>即興演奏とオスティナート書法</p> <p>当時の鍵盤楽器奏者にとって即興演奏の技術は欠くことのできない能力の一つだった。また即興演奏と密接な関係にあるのが、一定の低音主題の繰返しの上で音楽を変奏させていくオスティナート書法による作品である。これらの音楽と青年バッハとの関連をみていく。</p>
<p>第5回 9月30日(水)</p>	<p>コラール編曲の諸相</p> <p>ルター派の讃美歌であるコラールのメロディーに和声をつけて伴奏することは教会オルガニストにとって必須の役割であり、のちに精巧に作り込まれた作品も書かれるようになる。こうしたコラール編曲のタイプをいくつかに分類し、バッハとその他の作曲家の代表的な作品のいくつかを分析する。</p>
<p>第6回 10月21日(水)</p>	<p>バッハ一族、G. ベーム、J. パッヘルベルからの影響</p> <p>幼い時期に音楽の手ほどきを受けた兄のヨハン・クリストフを始め、バッハは一族の様々な先人たちの音楽を学んだ。リュubeckではベームのもとで楽譜の筆写をおこなっていたことが近年実証され、兄の師であったパッヘルベルからの影響も指摘できる。本講義ではこれらの状況と作品を見直す。</p>
<p>第7回 11月11日(水)</p>	<p>イタリア音楽からの影響—コレッリ、ヴィヴァルディ</p> <p>ヴァイマルでの活動期に入った後のバッハ作品に関してはイタリア音楽からの顕著な影響がしばしば論じられてきた。事実、この時期のバッハはコレッリやヴィヴァルディの作品の編曲も行っている。それらの事例を手がかりに、イタリア音楽とバッハについて様々な観点からみていく。</p>
<p>第8回 12月9日(水)</p>	<p>リトルネッロ形式の習得</p> <p>バッハがイタリア音楽から学んだ重要な要素の一つが、主として協奏曲で用いられるリトルネッロ形式である。ここではこの形式に着目し、バッハがどのように自作品に取り入れているかを検証する。また《イタリア協奏曲》BWV 971 を取り上げ、弦楽合奏としてのイメージの復元も試みたい。</p>